

提

案

生活の場、特別養護老人ホームふくらで豊かに看取る

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

～滋賀県社会福祉事業団とオープンスペースれがーとがひとつになりました～

社会福祉法人グロー 特別養護老人ホームふくら 看護師

金森 暢子

私は特別養護老人ホームの看護師です。

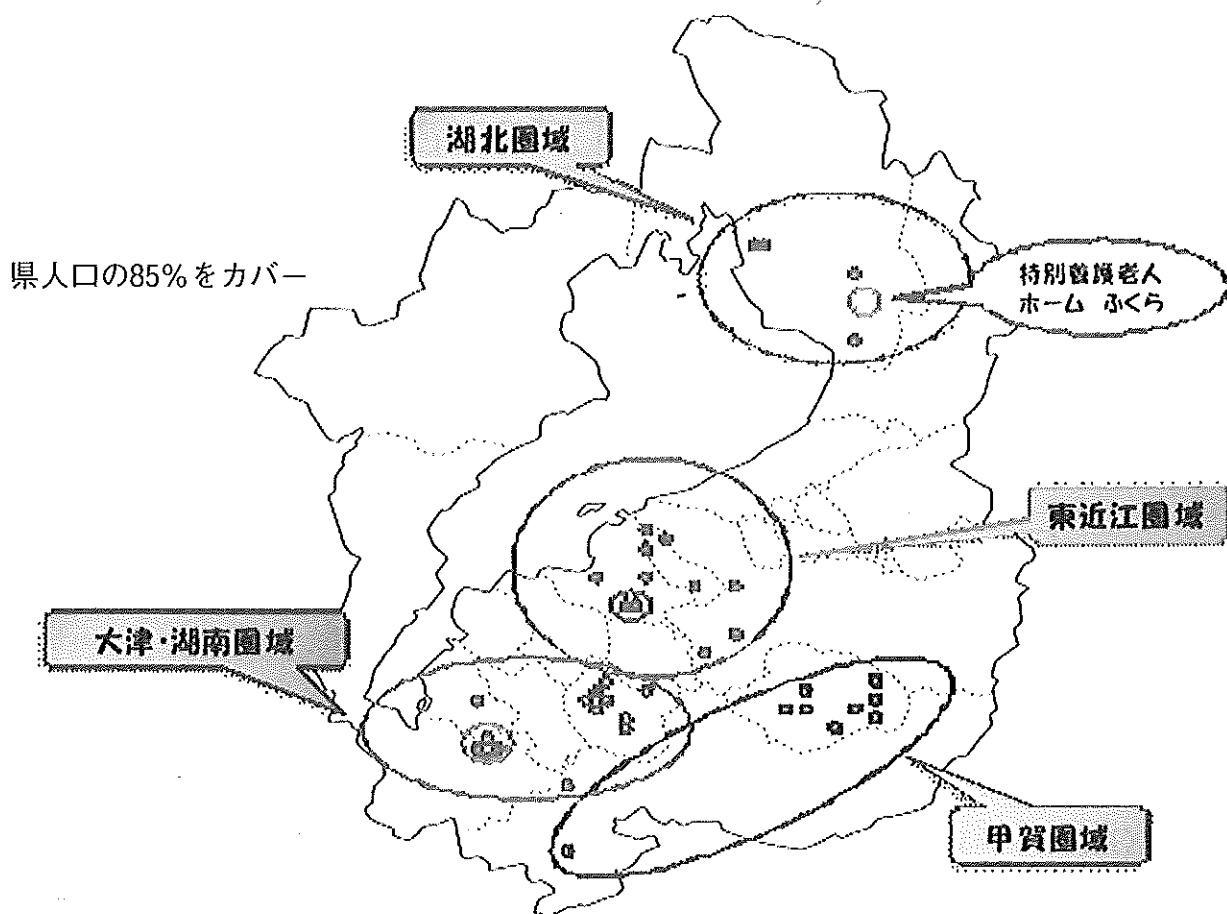
ふくらでは高齢化・病弱化が進み、生活の場であると共に看取りの場にもなっています。ふくらの看取りケアは一人ひとりのしよってこられた人生のリュックをひもとして、人生の集大成のお手伝いができるように努めています。一人ひとりの人生は違い、看取りケアも個別的な only one です。入居者には知的障害の方もおられます。「人」を見る時、障害も病気も人生も家族も含めて「その人」です。ふくらは「その人」を大切にしています。

社会福祉法人グロー

理事長は、北岡 賢剛氏

平成26年4月「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」と「社会福祉法人オープンスペースれがーと」がひとつになり新たに「社会福祉法人グロー」が生まれました。

「社会福祉法人グロー」は614名（平成26年6月現在 パートタイマー等含む）の職員が法人本部を含む15の拠点事業所で働いています。事業としては、高齢者への支援、障害がある方への支援、生活保護受給者で地域生活が困難な方への支援、高次脳機能障害・発達障害のある方への支援、触法障害者が地域で生活するための支援、障害のある方等の芸術活動の支援（アール・ブリュット）等を県内各所で行っています。



「お互いの良さを膨らませていく」

滋賀県社会福祉事業団
施設ケア中心
主に高齢者支援

オープンスペースれがーと
地域ケア中心
主に障害者支援

《法人理念》

私たちは2つの言葉を胸に、この地域に生きるすべての人の、安全な暮らしが保障され、尊厳を持ってその人らしく生きることができる社会を創っていきます。

「生きることが光になる」

全ての人は自らの力を通して、人に生きることの尊さを知らせるものであると考えます。

「ほほえむちから」

ほほえむちからを、人は誰でも持っています。向かい合う人に対するほほえむちから、向かい合う人のほほえむちからを大切にします。

特別養護老人ホームふくらの現状

「ふくら」で暮らす人たち（平成26年8月1日現在）

要介護状態	人数	%	内（男）	内（女）
要介護1	2	2.5	1	1
要介護2	4	5.0	2	2
要介護3	15	18.8	2	13
要介護4	34	42.5	13	21
要介護5	25	31.3	2	23
合 計	80	100.0	20	60

平均介護度	3.95
-------	------

平均入居年数	
男	2.23
女	2.63
計	2.53

平均入居期間・・・重度化、病弱化、重度の認知症で年々短くなって 2.5年

認知症について

認知症とは 脳の萎縮を伴う病気
生活に支障をきたす
進行して治らない

認知症の種類 ①アルツハイマー型 (50%)
②レビー小体型 (20%)
③脳血管性 (15%)
④前頭側頭型（ピック病）(2～3%)

認知症の症状 中核症状…必ず出現する（同じ症状が出る）
記憶障害・失認・失行・失語・実行機能障害・見当識障害・
理解力、判断力の低下 他
BPSD（行動・心理症状）…ある人となない人がいる（個人差がある）
放尿・異食・妄想・暴言・暴力・不潔行為・不安・焦燥・うつ症状 等

ふくらの認知症自立度（平成26年8月1日現在）

認知自立度	人数	%
正常	0	0.0
I	1	1.3
IIa	5	6.3
IIb	7	8.8
IIIa	22	27.5
IIIb	16	20.0
IV	22	27.5
M	7	8.8
合計	80	100.0

100%認知障害がある

私はふくらへ来て今年で9年目、それまで病院にいた。

私が病院でどんな最期を看ていたか…

- ・ 癌の終末期
- ・ 心不全の終末期
- ・ 重症患者さん
- ・ 医療者がベットを取り囲み、心マ等 家族は部屋の外
- ・ 家族がいてもモニターを見つめてる

ふくらへ来て

もともと看取りの文化はあった・ 昭和50年開設の老舗、今年で41年目、措置の時代から長い歴史

安楽に ふくらの看取りいいな

2年目の出会い 知的障害のTさん食べられない、スキルス

何ができるのか…さくら・桃缶・アニメのビデオ

終末期の希望を叶える

協力を求めてできる

今のその人に寄り添う

生活を続ける工夫

ケアが見えやすい人

これまでにたくさんのエピソード

ふくらの看取りもっと好き

その一方、何も出来ない人（安楽だけ）の人もある

ケアが見えにくい人

エピソードが少ない人

世間では 2009年 看取り介護加算の算定開始

2010年 石飛幸三先生「平穏死のすすめ」

「食べないから死ぬのではない、死ぬから食べない」

2012年 中村仁一先生「長生きしたけりゃ医療にかかわるな」

2012年 ふくらの嘱託医が家庭医になる

「老化は自然の流れです」と丁寧な説明が入る。

重度化、病弱化で亡くなる方、年間30名ほど

私（医療者）からは良い看取りだと、病院よりいい最期だと感じる機会が増える

利用者を最前線で支える生活支援員さんは…そう思ってる？

後悔、無力感、辛さ、えらさ…精神的に折れそうになる

ギャップ？なぜ？

担当と利用者さんだけの関係 できること少ない 成長できない

利用者さんにとって、もっといいケアができるのでは…豊かな看取り

スタッフにも、もっといい思いをしてほしい…自信や誇り

そこで…

ふくらの看取りケアについての意見を聞き、それをまとめ、分析し、

問題点

1. 家族と信頼関係ができないうちに終末期になってしまい、うまく連携できない
2. その人らしさがみえず何をするのかわからないまま亡くなられ、後悔や葛藤がある
3. 死を振り返る機会がないため、ベテランの経験が活かせず、教育が不十分

それぞれの解決策として

1. 家族をまじえた他職種での看取りカンファレンスの開催
(しょってきた人生のリュックを開く)
2. 看取りカンファレンスの内容をチームで共有し、チームでケアする
3. 偲びのカンファレンスでの振り返り、を実践してきた。

解決策を実践して現在2年近くになる。ふくらの看取りケアや、スタッフの向き合う姿勢が、大きく変わったと感じている。さあ、どう変わったのか…？

具体的な看取りケア

先生

急性期でも

家で

このような看取りを可能にしているのは

1. 施設長の方針として、地域の人を最期まで地域で看たい、看取りがスタッフの成長に大きく関わっている、という思いがあること。
2. 嘱託医が地域を守り支える家庭医であり、手厚いフォローが受けられること。
3. スタッフがこれまでの経験から、慣れた環境と人間関係の中で最期まで過ごして欲しいと感じていることと、その思いから丁寧に看取りケアに向き合っているからだと思っている。

看取りカンファレンスでその人のしょってきた人生のリュックをひもとくと、利用者さんや家族がもっと近くなり、ケアの方向性が見えるようになる。それを共有することでチームケアとなり、担当支援員がいない時のケアの質保障、ベテランから経験の浅いスタッフへの職場教育の場、それぞれが経験の引き出しを作る場となっている。

さらにケアの幅が広がり、他職種が連携できるようになり、ふくら全体での看取りに発展している。また家族と一緒にケアしたり、家族も含めたケアができるようになってきた。偲びのカンファレンスは充実感のアップ、痛みを吐き出すことで乗り越えられる、気持ちを共有できる安心感がある等の意見がでている。そして次への目標が見え、実際に次の看取りケアに活かせるようになっていく。

生活の場での看取りの意義

1. 自然死・平穏死
2. なじみの環境（空間的、人間的）の中で、生活の延長上にある最期をその人らしく
3. 介護（福祉）のプロ、看護（医療）のプロ、その人のプロ（家族）で協力

私たちに大切なのは

1. 老化を理解する

- ・老化は治療できない、自然のメカニズムと理解できると、死を恐れるよりその時まで豊かに過ごしてほしいと思えるようになる
- ・生活の場は不要な苦痛な治療をせず、自然に任せることができるよい環境がある
しかも、介護も看護も、栄養士も相談員もひとつ屋根の下にいる
医師は毎日はいらない、時々でいい、でも支えてもらっている安心感が必要
1分1秒の生命の長さquantity of lifeより
生活の質quality of life 死の質quality of death

2. 死生観を持つ

（家族にも持ってもらうために）

まだまだ病院で死ぬのがあたりまえの世間

悪くなったら病院へ行かんと

親戚に病院にも入れんかったて言われるとかなん

病院での痛いこと辛いことも、施設での穏やかな死も知らない

知識として病院とふくらの違いを説明する（往診時、家族交流会で講演）

日頃からリュックを少しずつひもといたケア

日頃から信頼関係をつくる 玄関窓口で 電話で ベットサイドで 買い物途中で 会っても

（スタッフも持つ）

本や研修で知識をつける

よい体験を積み上げる 利用者さんがよろこぶ 安らかなきれいな遺体
家族からのお礼の言葉 先輩や上司に褒めてもらう
充実感・達成感を感じる 等

死にゆく人の生きる力に寄り添える 最期までどう生きるかを支援できる

好物を少し食べる 栄養という段階でない・病院なら絶食
ただ喜んでほしい アイスクリーム、スイカ、カレー
これが最後の食事かも…

家へ帰る 墓参り 仏壇まいり
家を感じてハッとされる
お勤めを唱えられびっくり

五感に働きかける

3. 仕事を好きになる

仕事に楽しみを見つけ出す
職場に尊敬する人、好きな人をつくる
自分のストレスの発散方法を持つ

すると…成長できる

個人が 相乗効果でチームが ふくら全体が

豊かなケアを提供しようと努力する中で、利用者さんの反応や、家族の言葉や笑顔で、私たちが豊かな気持ちになれ、亡くなられても後悔や無力感でなく、自然に「お疲れ様、ありがとう」と感じられる。家族からの「ふくらでよかった」の言葉は、豊かな達成感となり、次の人に向き合う力になっている。この「豊かの相互作用」が、成長の原動力だと感じている。また、この気持ちは、専門職としてだけでなく、「人」としての成長も助けてもらっていると感じている。

ふくらの看取りケアは、安楽を整えるというベースの上に、利用者さんの人生や、家族の思いをひもといて、その人らしい人生の、集大成のお手伝いができるようになった。また、このonly oneの看取りケアは、利用者さんが亡くなって完結ではなく、家族にとってもよい体験となり、未来につながっていくと最近気がついた。

座右の銘 「お金があっても頭があっても大きい心〜
玄関に思い出コーナー
法事でアルバム
ふくらのケアが家族に、親戚に、地域につながっていく

仕事の中に感動がありますか？

- ・鳥肌がたつ
- ・頭がボーっとする（リラックス物質が脳に分泌されたような、もう仕事を終えて帰ってもいいような満足感）

時々神様が頑張る自分にくれるプレゼント
仲間と共感することでさらにうれしい
福祉の仕事の醍醐味

家族からのありがたい手紙

最期まで看させてくれてありがとう。これからも良いご縁がありますように・・・